



●オダイル・アサドのソロコンサート

ニューヨーク・メトロポリタン美術館のグレイス・レイニー・ロジャーズ・ホールで今年2月、オダイル・アサドがソロ・コンサートを開いた。アサド兄弟は、これまで40年間にわたりデュオとして活動をしてきたが、2008年からはオダイルが、デュエットを継続しながらソロの演奏活動を始めた。2010年にはソロ演奏を録音した彼の初めてのCD“エル・カミナンテ”をGHAレコードからリリースした。この晩のコンサートは、オダイル・アサドが初めて行なう北米ソロ・コンサートツアーの初日だった。最近、彼の兄であるセルジオ・アサドは、グラミー賞のベスト・コンテンポラリー・クラシック作曲部門にノミネートされたが、これは彼にとって2度目のこと。アサド兄弟のデュオとしてのツアーは、2012年4月にチェロのヨーヨー・マとピアニストのキャサリン・ストットとの共演が予定されている。

オダイル・アサドは、ギター製作家トーマス・ハンフリーからソロの演奏活動を強く勧められたことに感謝している。アサド兄弟は、永年、ハンフリーが製作したギターを愛用してきた。ところが2008年にハンフリーが思いがけず急逝したため、オダイルは、友人であるトーマスの思い出を称えるべく、彼のソロコンサートの初演をトーマス・ハンフリーに捧げることにした。

オダイル・アサドは、足台やギターサポート器具を一切使用せず、ネックを垂直に近く立てて体で支えてギターを演奏

した。彼は、このコンサートが始まる直前30分前に、カナダのオタワから飛んできたと言った。彼がコンサートの前半で演奏した曲目は、アグスティン・バリオスの〈郷愁のショーロ〉、ヴィラ＝ロボスの〈ショーロス第1番〉〈前奏曲第3番“バッハ讃歌”〉、〈練習曲第10番〉だった。ヴィラ＝ロボスは、1930年から1945年の間に、伝統的なブラジルのショーロの形式に尊敬するバッハを組み入れた〈ブラジル風バッハ〉というタイトルの作品を9曲書いた。

オダイル・アサドは、アルフレッド・ダローチャ・ヴィアンナ・フィルホ作曲ローラン・ディアンズ編曲の情緒的で詩的な〈バラの運命〉と〈1対0 Um a Zero〉を演奏した。ブラジルのワルツ〈バラの運命〉は、1897年に、家族の14番目の子供としてリオデジャネイロで生まれ“ピシギーニャ”の愛称で有名なアルフレッド・ダローチャ・ヴィアンナ・フィルホが作曲した最初の作品である。〈1対0〉は、1919年に開かれたサッカーの国際大会としては最初のタイトルである南米選手権試合において、相手のウルグアイに対して唯一のゴールを決めて、ブラジルに勝利をもたらしたサッカー選手アーサー・フリーデンライヒを讃えて作曲された作品である。

続いてオダイルが演奏したのは、アストル・ピアソラの作品〈ブエノスアイレスの冬〉とニューヨークのオーガスティン基金のリクエストで1992年にセルジオ・アサドがギターソロに編曲した《ブエノスアイレスの春》だった。オダイル・アサドは、レオ・ブローウェルの本名がJuan Leovigildo Brouwerであることを初めて知ったと舞台上で語った。ブローウェルの〈ソナタ・デル・カミナンテ（旅人）〉は、滝のようになだれ落ちる激しいトリルが特徴的で、音楽の楽しさを感じさせてくれた。この作品を2日か3日で書いたブローウェルは、“オダイル以外のギタリストには演奏不可能な曲だが、ソナタのスムーズな音に捧げられたものだ”と説明したという。

コンサートの後半では、伝統的なブラジル音楽をテーマにセルジオ・アサドが作曲した《6つの小品 Seis Brevidades》

を演奏した。セルジオ・アサドは、2008年にシカゴとパリに滞在中にこの曲を書いた。小品6曲をセットにしたこの曲は、お互いに何の関係もないが、それぞれラテンアメリカ音楽をテーマにした作品だという。〈シュワ Chuva〉というタイトルの曲は、シカゴの雨の日に感じた最初の印象を表し、〈午後 Tarde〉はシカゴのネービー埠頭で過ごした暑い午後の思い出を描いている。〈フェリス Feliz〉はポルトガル語で幸せという意味だが、安らぎを感じた数日を表現している。〈シンガ Ginga〉は歩きながらスウィングすることで、セーヌ川のほとりを散策した時に触発された作品。〈カンティガ Cantiga〉は夕暮れ時のパリでメロディーが浮かんだという。最後の曲〈サルティタンテ Saltitante〉はジャンプを意味するが、セルジオ・アサドがパリで雨の中を家に帰るときのイメージが現われている。この曲の題名となっている brevidade とはブラジルの小さなケーキのことで、この小品6曲はそれぞれが“とても甘いショートケーキ”を暗示しているという。

オダイルが演奏したケヴィン・キャラハンの〈赤いファンタジー〉という曲は、キャラハンがオダイルと2人でワインの色と味を楽しんだある晩の思い出に着想を得て書いた作品。この音楽ファンタジーはスペインの香りで始まり、低音の下降するメロディーに続き、突然ロックのリズムと南米のダンスのリズムに色づけされたジャズのブギのリズムに発展し、



アサド兄弟 Photo: Fadi Kheir
左からオダイル・アサド、セルジオ・アサド。

ゆっくりとした黙想するようなワルツへと続く。エグベルト・ジスモンチの〈想い出のファド Memori e fado〉と〈フレーヴォ Frevo〉を演奏するにあたり、オダイルが舞台上から話をして、この演奏を姪のクラリス・アサドに捧げたいとコメントした。クラリス・アサドは、作曲家であり〈Dancas Nativas〉という作品で、2009年度のラテングラミー賞にノミネートされている。ジスモンチの曲は、2つの独立した旋律が、非常に感動的で、詩的だった。

●ブラジル・ギターデュオ

今年2月、ニューヨーク・クラシカル・ギター・ソサエティーがブラジル・ギターデュオのコンサートを開いた。ジョアン・ルイス (João Luiz) とダグラス・ローラ (Douglas Lora) がサンパウロで初めて会ったのは、2人がギターを勉強していた10代の学生時代だった。共に、エンリケ・ピント、ファビオ・ザノン、パウロ・マーテッリ、セルジオ・アブレウに師事していた。ダグラス・ローラが音楽学で修士号を取ったのはレネ・ゴンサレス博士が教授をしていたマイアミ大学でのこと。一方、ジョアン・ルイスは現在ニューヨークのマンネス音楽院でマイケル・ニューマンに師事して音楽学の修士課程に学んでいる。このデュオがナクソスからリリースしたデビュー・アルバムは、C = テデスコのギター二重奏全曲を演奏した2枚のCDで、1枚はC = テデスコの没後40周年を記念して2008年にリリース、2枚目は2009年にリリースされ高評を得ている。C = テデスコがギター二重奏のために書いた作品全曲を録音したデュオは、彼らが最初である。

コンサートのオープニングはアストル・ピアソラの〈Zita〉で、明快なアーティキュレーションとマーチのリズム、下降する低音、そしてリズムカルな打弦を伴ったトリルで演奏した。続いて演奏したラモアの〈ガヴォットと変奏 Gavotte and Variations〉では、まるでハーブシコードのような音をギターから引き出した。プログラムには他に、C = テデスコの〈プレリュードとフーガ嬰ハ短調〉と、彼らの繊細で詩的な美しい解釈で演奏された〈カノン風ソナチネ Op.196〉の中の〈 Rond 形式のファンダンゴ〉が含まれてい

た。クロード・ドビュッシーのユーモラスな〈子供の領分〉から〈小さな羊飼ひ〉、〈ゴリウォークのケイクウォーク〉、〈人形のセレナード〉の3曲を演奏し、聴衆を楽しませた。前半の締めはダグラス・ローラが作曲したメロディックな〈ワルツ〉と〈Postludio〉の2曲をにぎやかな音の響きとピッチカートで連続で終えた。

コンサートの後半はブラジルの作曲家の作品に焦点を当てた。初めに演奏したエドゥ・ロボの劇的な〈Casa Forte〉では、表面板を打楽器代わりに使い、〈Zanzibar〉では、最後に、表面板を爆発的に激しく

叩いて終わった。デュオは、ジャコー・ド・バンドリンの豊かな表情と絵画のような組曲〈カリオカの夜 Noites Cariocas〉、〈ココヤシのケーキ Doce de Coco〉、〈Sete Aneis〉の3曲を演奏した。コンサートの最後は、ブラジルの社交ダンス：マシーシェをベースにしたマルコ・ペレイラの技巧的な作品〈Bate Coxa〉を演奏した。ブラジル・ギターデュオは、オダイル・アサド同様、彼らの個性的な至芸を披露した。すべてのギタリストが切望する、質の高い演奏と豊かな音楽表現を確立した彼らに対して、聴衆はスタンディング・オベーションで応えた。



ブラジル・ギターデュオ。左からジョアン・ルイス、ダグラス・ローラ。